



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3006号 2016.5.7 発行

「世界の子どもを救おう」 未使用切手など受け付け



大阪日日新聞 2016年5月5日
外国人観光客もバザー商品の購入で協力

大阪市北区大淀中1丁目の新梅田シティのワンダースクエアで「こどもの日チャリティイベントー世界の子どもを救おう！」(実行委員会主催)が開かれている。書き損じはがきや未使用切手、外国の紙幣やコインを受け付け、バザーやステージショーなどを行っている。5日まで。

13回目の今年も、世界の恵まれない子どもたちのことを考え、未使用切手などを持参したりバザーの商品を買ったりすることを通し、子どもたちを救うための行動の第一歩を踏み出してもらおうと3日から3日間実施。

10円や50円の「ワンコインバザー」やフォトスポットとして設置したクマやゴリラの「リアルアニマル」と撮った写真を缶バッジにできるコーナーなどが設けられ、親子連れや外国人観光客らが立ち寄っている。

大阪ユニセフ協会の古野喜政副会長は「小さな力かもしれないがみんなでやれば大きなものにつながっていく。何をしたら幸せになれるか考えるきっかけになれば」と話している。

5日は大阪新梅田シティライオンズクラブによる、餅つきも予定している。正午～午後5時開場。

【日本一お金持ちの村】中2生全員に米国旅行プレゼント 100歳の祝い金は100万円 独居老人には毎日乳酸菌飲料… 産経新聞 2016年5月6日



公開されたH2Aロケット30号機の中
心部分=2015年12月、愛知県飛島村
(村本聡撮影)



百歳のお祝いに100万円、中学生全員をアメリカに派遣ー。愛知県の西南部に位置する飛島(とびしま)村は、日本一財政が豊かな村だ。全国の市町村が行政サービスを提供するための財源を確保するのに四苦八苦している中、人もうらやむ住環境を実現しているのだ。

数値が大きいほど財源に余裕があることを示す財政力指数。「1を超えるのさえ大変」(総務省)といわれるが、平成26年度の飛島村の指数は2.07で全国1位。2位の北海道

泊村（1・88）以下を大きく引き離しダントツだ。

村は名古屋市に隣接している。22・42平方キロと、東京の品川区とほぼ同じ広さ。コメや野菜の栽培が盛んだが、名古屋港の一角を占める工業の村でもある。臨海工業地帯にはコンテナ埠頭（ふとう）や鉄鋼関連事業所、火力発電所が立ち並ぶ。中でも目を引くのは三菱重工名古屋航空宇宙システム製作所飛島工場だ。ここで最先端の航空機やロケットを製作している。こうした企業の固定資産税が豊かな財源を支えている。

他の市町村では考えられないような住民サービスを実現している。毎年、お年寄りに長寿奉祝金を配布している。金額は90歳＝20万円▽95歳＝50万円▽100歳＝100万円ーだ。また、お年寄りの安否確認を目的に、独居老人に乳酸菌飲料を配布している。

高齢者だけでなく、未来を担う子供たちにもサービスは手厚い。文化交流を目的に、中学2年生全員を米カリフォルニア州に派遣している。7日間の日程で、姉妹都市のリオビスタ市を訪れる。旅費と宿泊費は村が負担している。

温水プールやトレーニングジム、図書館を備えた豪華な複合施設もあり、スポーツや生涯学習を楽しめる。

ただ、全体が平らで、低湿地地帯となっているため、村の歴史は東海地方の災害の歴史と重なる。特に昭和34年の伊勢湾台風では村の130人以上が犠牲になった。水は3カ月も引かなかった。今も風水害や津波への対策は村の最重要課題の一つだ。

村の南部は工業地帯だが、北部は農業地帯。そもそも村の大部分が干拓地で、宅地を広げる余地がないのだ。人口は約4500人で、ここ数十年増減はほとんどない。井田晴己村議は「人口が増えないと活力につながらない。多くの人が感じている不満です」と話している。（櫛田寿宏）

俺にもできるんじゃ 高知市の重度障害者の男性が自立支援活動

高知新聞 2016年5月6日



村田一平さんは首から下の体を動かすことができないが、ヘルパーの男性＝右＝に細かく指示を出して自分好みの料理を“作ることができる”（写真はいずれも高知市平和町）

村田一平さん（32）は事故の後遺症で首から下の体を動かすことができない。呼吸器は24時間付けっぱなし。そんな状態だが、高知市平和町の家でヘルパーの力を借りながら1人暮らしをし、居酒屋に出掛けたり、川下りなどのアウトドアを楽しんだり。この4月からは障害者の自立を支援する活動も始めた。原動力は「俺にもできるんじゃないか」という気持ちだ。

「タマネギは千切りで。ジャガイモも同じように」

野菜を切る男性ヘルパーに村田さんが細かく指示を出していく。車いすに腰掛けてヘルパーさんの手元を眺める視線は、どこか楽しそうだ。

「ルーは2種類使って」「ガラムマサラがあるから、それも入れて」。50分ほどでカレーが完成した。一口どうぞと勧められスプーンを口に運んだ。

「どうですか？ 僕の手料理は」。村田さんはそう言って満足そうに笑った。

事故は中学3年の時だった。故郷の高知県高岡郡津野町で友達が運転するバイクに2人乗りしていて、カーブを曲がりきれず崖を約30メートル下まで転落した。

意識がはっきりしたのは、事故から1週間ほどしてからだった。高知市内の病院のベッドの上。いろいろな管が体に付いているのが見えた。体は動かない。しゃべることもできなかった。

約3カ月後、集中治療室から一般病棟に移るという日。医師から告げられた。

「もうベッドから動くことはできないかもしれません」
村田さんもうすすり気付いてはいたが、実際に宣告されると正気ではいられなかった。「ボロボロ崩れるように泣いたですね」。首の骨を折ったことによる頸髄（けいずい）損傷だった。



動かない体。親への申し訳なさ。「生きちゃってもいかん存在やとずっと思っていました」

それでもリハビリをするうちに、しゃべれるようになってきた。1時間ほどなら呼吸器なしで自分で呼吸できるようにもなった。少しずつ「生きる」力を取り戻していった。

退院できる日はやって来た。18歳になっていた。

その後、身体障害者療護施設に入所。外出もできずここでの生活は窮屈だった。もんもんとする日々が続いたが、ある日、自分と同じような状態の人が1人暮らしをしているという話を、人づてに聞いた。しかもその人は、しゃべることができないという。

「俺より重度やん。俺にもできるんじゃないか」

21歳で施設を出て、高知市中の島にある自宅で母親と妹と暮らすことを決めた。

外出するため、リフトで車に乗り込む村田一平さん

「役割がほしい。認められたい」。自宅暮らしを始めると同時に、そんな思いが募るようになった。20代の中頃。働くこと、自分にできること…。とにかく情報が欲しくて、全国各地の研修会に出掛けるようになった。

行動してみると、すぐに答えは見つかった。

障害のある人が、同じように障害のある人を支援する団体が県外には多くあることを知った。「障害者が地域で活躍して、それが仕事になるんですよ。これを高知でつくったらすごいな」と思った。

研修を通し、全国の仲間と知り合うことで、世界は一気に広がった。暗い日々から解放された気がした。

2015年1月には親元を離れ、1人での生活を始めた。自立したいという気持ちと、母親の負担を考えて出した結論だった。

あごの下のコントローラーを操作し車いすを動かす

日々の生活はヘルパー5人が24時間態勢でサポートしてくれる。あごの下のコントローラーを動かして車いすを操作し、パソコンも特殊な眼鏡や口にくわえたチューブで使うことができる。

事故の後10年ほどは「どう生きていいか分からなかった」。だから人生の楽しみを見いだすことなんかできなかった。しかし、今は違う。

「できなかったことを取り戻したい」。居酒屋で楽しみ、四万十市の花火大会に出掛け、県外旅行に行き、仕事もする。「やりたいことができている感じ。満たされていますね」と言う。

体が自由に動くことへの憧れがないと言えようそになる。しかし、「それは無理なことやないですか。だったら、自分の役割と目標に向かって進んでいきたいんです」。

病院や施設で生活していた頃、あんなに長く感じていた1日が今はそう思わない。自立を手に入れたから。

「俺みたいな重度の人でもできるというのを見せたい。『自分には無理』と思っている人



を変えていきたいんです」

「障害があっても自立して生活する人に増えてほしい」。そんな思いから、重度障害者の自立を応援する自立生活センター「アライズ」を自宅で立ち上げ、1人で活動している。

5月21日～7月9日は毎週土曜日の午後1～4時、高知市旭町2丁目の障害者福祉センターで、村田さんが講師として自立生活のノウハウを伝授する講習などを開く。

村田さんは毎日が充実している、という。そしてこれからの自分について、こう話した。

「重度障害者には買い物をしたり映画を見たりという、普通の人の経験がないんです。でも、自分が『自立』できたことで、他の人に『こうやで』って言える。それが僕の役割やと思うんです」

問い合わせは「アライズ」(090・8699・1761)へ。

事件事故報道に「明日はわが身」 介護業界関係者は語る

ダイヤモンドオンライン 2016年5月6日

介護施設での事件や事故が相次いで報道されているが、このようなリスクはどのホームにもあるという。複数の有料老人ホームを有する大手介護会社の幹部から匿名を条件に実情を語ってもらった。(聞き手・構成/ダイヤモンド・オンライン編集部 山本猛嗣)

事故や事件が心配でたまらない うちの施設でも可能性はゼロではない

(C) [daj/amanaimages](#) (C) [Gregor Schuster/zefa/Corbis/amanaimages](#) *写真はイメージです

メッセージグループの介護付き有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅(サ高住)で、虐待や事故が相次いで報道され、世間から非難の対象になっています。

ちょっと前には、ワタミの介護の有料老人ホームでも入浴中の事故などがあり、激しいバッシングにさらされました。

私が勤務する会社の有料老人ホームは、世間から見れば、そこそこお金持ち向けの立派なホームだと思います。職員の教育も他のホームに比べたら、相当にまじな方だと自負しています。

それでも、最近は事故や事件がとても心配で、たまらない。うちの施設でも、いつ、あのような事件が起こってしまうのか、可能性はゼロではないからです。

ただでさえ、介護の現場では、転倒などの事故は日常茶飯事です。

それに加え、近年は介護業界全体で人材の質の劣化が急速に進んでいます。

もともと私は介護業界の人間ではなく、大手民間企業から人事担当者として移籍してきました。

そこで、初めてホームの職員採用の現場を見たときの衝撃は忘れることができません。以前の職場に比べると、あまりにも人材の落差が大きかったからです。

まず、電話での問い合わせ時点で、言葉遣いがめっちゃくちゃな人、常識外れの人が多い。「履歴書を送る切手代がないんっすよ。どうしたらいいんっすか」とまったく悪びれもせず聞いてくる。

空欄や誤字だらけの履歴書は当たり前、写真を貼っていない履歴書も大量に届きます。採用の面接では、スーツで来ない人はざらです。Tシャツ、短パンにサンダル姿の人もありました。遅刻も珍しくありません。

通常の民間企業なら “規格外” の応募者が多い

そもそも約束した面接に来ないケースが多い。通常の民間企業なら“規格外”の応募者があまりにも多いのです。

このような介護人材の質の劣化は、2009年に厚生労働省による雇用対策で介護職を斡旋



するようになってから顕著になりました。

かつて失業保険の受給中にヘルパーの資格取得講座を受講すると、受講料が無料になるどころか、日当まで出ました。小遣い稼ぎの人、「次の職が見つかるまで」とか「介護くらい誰でもできるだろう」と安易に考えた人が殺到しました。今でも、状況はあまり変わってないのではないのでしょうか。

それでもハローワークからの紹介だと断れないので、面接には呼ぶ。案の定、無断欠席が多い。その繰り返しです。

こんなことを言うと怒られるかもしれませんが、応募者の中には、他の業界で通用しない人、社会人として失格の烙印を押されてしまった人が目立ちます。うつ病などの精神疾患を抱えている人も多いという印象ですね。

介護はそもそも人間性やコミュニケーションが大事といわれていますが、その肝心な人間性やコミュニケーションに問題がある人が少なくないのです。

うちの場合、そこそこ大手なので、有名企業をリストラされて、再就職を目指す中高年の応募者も少なくありません。社会常識はきちんとしている方が多いのですが、まず採用されません。

往々にしてプライドが高く順応性に乏しいからです。現場で年下の女性の指示に従ったどこもかしこも、「多少のことは目をつむって採用」という“基準”みたいなものはありますが、その最低の採用基準にさえも達する応募者は少ない。

しかも、その採用のハードルは、年々下がる一方です。

うちのホームの場合、「あまりにも」という人はさすがに断りますが、現在の介護業界では、応募者は即採用というのが実態です。

というのも、有料老人ホームなどの介護施設には、人員配置の最低基準というのがあります。職員の数が一定の基準を満たさなければ、事業を続けることができません。経営者からすれば、まず、大前提として頭数をそろえる必要があるのです。

人手不足のときこそ怖い

“経験者歓迎”のわな

ただでさえ、人手不足の現場に、未熟な新人や介護スキルに問題のある人を配置すれば、ますます現場は回らなくなってしまいます。

結果的に、ストレスを感じて辞める職員が増え、採用の基準を下げて職員をかき集めるという悪循環に陥ることになります。

そんなときに怖いのが、不祥事を起こし得る危険人物を採用してしまうことが多々あることです。

人手不足の状況では、育てて将来戦力になるような人よりも、どうしても経験者を優遇して採用しがちです。

しかし、その経験は単なる年数や資格の有無でしか判断できません。過去、高齢者を虐待したり、入居者のお金を盗んだりして解雇されたような要注意人物を「経験者」として歓迎してしまうケースがあるのです。

実は過去、うちのホームでも、職員による窃盗が発覚したことがあります。「渡しておいた現金が減っている」という入居者の家族からの相談をきっかけに、調べてみたら、ある新人の職員が入居者の財布から現金を抜き取っていたことを認めました。その職員は以前の職場でも同様の問題を起こしていたようです。

その件については、うちのホームが誠意を尽くして謝罪した結果、表沙汰にはなりませんでしたが。これまで入居者の家族とホームとの信頼関係が非常に良好であったことが幸いしたのだと思います。

いや、単に運が良かっただけなのかもしれません。

そもそも介護業界では、メッセージやワタミの介護は、世間でいわれるほど、「極悪なホーム」という認識はありません。

メッセージの創業者で会長の橋本俊明さんは、その経営手腕だけでなく、高齢者に対す

る人権意識も非常に高く、業界でも一目置かれるほどの方でした。

ワタミグループの創業者である渡邊美樹さんも、私の知るベテランの施設長は、渡邊さんから介護事業に対する思いを聞き、「感動して胸が熱くなった」と言っていました。

いずれもホーム数を急拡大し、「人材の質」を維持できなかつたのだと思います。このようなホームは今後も出るでしょう。人材の質の低下は大きな経営リスクであり、「明日は我が身」とおびえているのが現状です。(談)

法務省&吉本芸人、異例のコラボ 漫画で社会明るく 日本経済新聞 2016年5月6日

お堅いイメージの法務省と吉本興業のお笑い芸人という異例のコラボレーションが話題になっている。法務省は「社会を明るくする運動」に吉本所属のお笑い芸人、鉄拳さんのパラパラ漫画を活用する。鉄拳さんはこのほど、更生保護をテーマにしたパラパラ漫画を描き下ろし、映像化したものを7月からテレビCMや街頭、スポーツ施設などの電光掲示板で流す予定だ。

鉄拳さんはスケッチブックを活用したお笑い芸で人気があるが、最近はパラパラ漫画の制作に注力している。パラパラ漫画とは大量の紙に一コマずつ絵を描き、それを早送りすることで、動いているように見せるもの。学生時代、分厚い教科書のすみに、パラパラ漫画を描いたことがある人もいるかもしれない。

あいさつする鉄拳さん(左から2人目)ら

鉄拳さんのパラパラ漫画は芸人の余技の域をはるかに超えたプロ級で、代表作の「振り子」は日本漫画家協会賞特別賞を受賞している。福岡市の飲酒運転撲滅キャンペーンやJR西日本のホームからの転落防止活動などにも採用され、鉄拳さんのパラパラ漫画への注目度は急上昇している。

このほど描き下ろした作品は、過ちを犯した少年が保護司や地域の住人に見守られながら立ち直っていくストーリーで、これを4分弱の映像作品に仕上げた。鉄拳さんのパラパラ漫画は1秒間に6枚の絵が必要なので、約1500枚の漫画を描いたという。

法務省の主導する「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行を犯した人たちの更生に理解を深め、犯罪や非行のない明るい社会を築くための全国的な運動で、昭和26年に始まり今年で66回目。ゆるキャラ「更生ペンギンのホゴちゃん」も登場しているが、長年やっているわりには認知度がいまひとつだった。



法務省の片岡弘保護局長は「若者層に抜群の知名度がある鉄拳さんの少年更生ストーリーは、運動の理解を深めるうえで絶好の作品になる」と語る。

鉄拳さんのパラパラ漫画は、家族や人生の転機をテーマにした、ほろっとさせるものが多い。今回の作品も非行からの立ち直りがテーマで、更生をサポートする保護司が重要な役割を果たしている。

鉄拳さん自身、保護司の存在を知らなかったが、「更生を手助けする重要な仕事を、地道に無給でやっている方が全国に5万人もいるのはすごい」と語り、制作にも力がいった。

更生ペンギンのホゴちゃんと

筆者の亡祖父も長年、静岡の田舎で保護司をしていた。刑期を終えた人が祖父を訪ねてくると、やさしく励まし、小遣いなど渡していた光景を思い出す。筆者が昔、たばこやパチンコが見つかり、学校や親にこっぴどく怒られた時、保護司の祖



父は、にっこり笑って「あまり親に心配かけるなよ」と筆者の肩をポンとたたいただけだった。それで「もうやめよう」と思った。

鉄拳さんのパラパラ漫画にも、そんな無言のやさしさがある。代表作の「振り子」は、何度みても涙腺がゆるんでしまう。(編集委員 鈴木亮)

社説：こどもの日に 大人こそ役目をしっかりと

京都新聞 2016年05月05日

詩人の谷川俊太郎さんのこんな作品がある。

<わたしがたねをまかなければ

はなは ひらかない

ぼくが あしをふみだすとき

みちは かぎりない

じぶんでかんがえ

じぶんではじめる

幸小(さいわいしょう)のわたしたち

わたしがあすを あきらめたら

あさは もうこない

ぼくがほしを みつめるとき

そらは かぎりない

あせらず こつこつ

ねばって やりぬく

幸小のわたしたち>

幸小とは東京都立川市にある小学校のこと。40年余り前に書かれた校歌だ。

谷川さんは今春開校した京都市立京都工学院高(洛陽工、伏見工高の再編校)の校歌も作っている。

<問いが生む 新たな答

ともどもに 励む楽しさ

すこやかにしなやかに 私たち

知恵とわざ学び続けて未来へと せめぎあい 渦巻く時代に先駆けて>

最後の一文に、谷川さんはこだわったようだ。せめぎあいは前向きでない、との市側の意見に「現実を直視せず前向きな言葉ばかりを使えば、歌は単なるきれいごとになる」と答えたという。

幸小にも「あさは もうこない」という歌詞がある。ただ、どちらも全体として暗さはない。むしろ、すくくと自力で立つ子どものイメージが浮かぶ。

変化の激しい現代社会を生き抜く力をどう育むか。甘やかすのでも突き放すのでもなく、「じぶんでかんがえ」「ともどもに励む楽しさ」に気付かせることが大人の役目なのだろう。

寄り道の大切さ教え

子どもに大切な「育ち」と「学び」。その「学び」が変わろうとしている。次期学習指導要領と大学入試改革をめぐる議論に、それは端的に表れている。

暗記した知識や公式を使うだけではうまくいかない課題や、答えが一つではない問いに答えを出す。周りとは協調しながら解決策を探る。こうした力を養い、入試の在り方も変えるという。

道筋はまだ見通せない。ハードルも高そうだ。とはいえ、方向性はおそらく多くの人が共有できるだろう。

すぐ役に立つことばかりでなく、役に立つかどうか分からないことにも興味を持ち、納得できるまで追いかけていく。そんな寄り道の大切さも子どもに教えたい。

宮津市出身の国語教師で、2013年に101歳で亡くなった橋本武さんは横道にそれる授業の名人だった。神戸の進学校・灘中で3年間かけて明治期の小説「銀の匙(さじ)」

を読み込む授業で知られた。

貧困の歯止め見えず

物語にぺんぺん草（ナズナ）が出てくると、そこから春の七草、関連する和歌、秋の七草との違いへと話題を広げる。駄菓子や凧（たこ）が登場すれば、実際にそれを食べたり作ったりして体感する。桃の節句が描かれれば、他の年中行事や祝日の起源、風習を徹底的に調べる。

私立校で少人数だからこそその授業とはいえ、遊び心や好奇心を生かした学びは、家庭や地域の日常の中でも手本にできそうだ。

ただ、気になるのは、そんなふうにも子どもにじっくり向き合えない家庭が増えていることだ。

ひとり親だったり、不安定な仕事を昼夜掛け持ちしたりで、親子がともに過ごす時間が少ない。温かな食事を一緒に囲むことができない。病気やけがをしても病院に行けず、外で思いきり遊べない。

健全な「育ち」を妨げる貧困の広がり、歯止めがかかっていない。深刻な児童虐待の事例も相次いでいる。

大地震や津波の影響で、生活環境が大きく変わってしまった子どもたちもいる。親きょうだいを亡くしたり、離ればなれの暮らしが長引いたり。学校が避難所になり、多くの親子が不自由な生活や車中泊を余儀なくされている熊本の今後も気がかりだ。

官民の本気どこまで

子どもの貧困をめぐるのは、対策の一つとして安倍晋三首相が旗振り役となって昨年10月に発足した「子供の未来応援基金」がある。5カ月間に集まった寄付金は、わずか2千万円足らず。学習支援や食事の提供、放課後の居場所づくりなどのために億単位の寄付を見込むものの、期待された大手企業の反応は鈍く、呼びかけた政府もどこまで本気なのか疑わざるを得ない。

大人は本当に、ぼくたちわたしたちのことを考えてくれているのー。どこからかそんな声が聞こえてきそうだ。

大型連休中、街で、野山で、いろんな子どもたちを目にする。その姿から一人ひとりの未来を想像してみたい。青空の下ではしゃぐことのかなわぬ子ども、海に向こうで内戦やテロにおびえる子どもがいることにも思いをめぐらせ、何ができるかを考えたい。

<ここに生き 世界をみつめ

今日に生き 明日を夢見る>

京都工学院高の校歌の2番は、こう歌い出す。子どもたちの夢を大人がしっかり後押ししたい。

ウィンドウズ10有料に 7月末から1万9千円

神戸新聞 2016年5月6日

【ニューヨーク共同】米マイクロソフトは5日、インターネットを通じて無料提供している最新基本ソフト（OS）「ウィンドウズ10」を7月30日以降は有料化すると発表した。日本法人によると、日本では1万9008円（税込み）で販売する。

昨年7月29日に「ウィンドウズ7 SP1」などの利用者を対象に無料提供を開始。これまでは無料期間を延長するか、有料化するかを明確にしていなかった。価格の公表で、残り3カ月を切った無料期間中に「7」や「8」からの更新を促し、顧客を囲い込む狙いがあるとみられる。今回公表したのは主に個人向けの「ホーム」と呼ばれるエディションの価格。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行